

ホメロス 『イリアス』 第十二歌

田中利光

このように陣屋では、メノイテイオスの勇敢な息子パトロクロスが

介抱していた、傷ついたエウリュピュロスを。一方入り乱れて戦っていた、アルゴス人とトロイア人が。そしてことはもう定まっていた、

濠とその上部の厚い防壁はもはや持ちこたえることができないと。

ダナオス人は防壁を船の守りに造り、そして濠をめぐらしたのだが、

しかるべき立派な生け贄を、神々に捧げなかった、

脚速き船と沢山の戦利品をその中に困って

守ろうというのに。それは不死なる神々の意に反して造られていたのだった。

またそれは長い間そのまま残ることもなかった。

ヘクトルが生きており、そしてアキレウスが怒り続け、

そしてプリアモス王の都が略奪されずにあった間は、

その間はアカイア人の大きな防壁も残ったままだった。

しかしながらトロイア人の名立たる者がことごとく死に、

そしてアルゴス人のうち多くの者が討たれ、生き残ったものもあったが、

キーワード…ホメロス、イリアス、叙事詩

プリアモスの都が十年めに破壊され、

そしてアルゴス人が船で故国に帰った時、

その時、ポセイドンとアポロンは企てたのだった、

もろもろの河水の勢いを集めて、防壁を壊すことを、

イーデーの山並みから海に流れ入る限りの河々、

レソス河もヘプタポロス河もカレソス河もロディオス河も

グレニコス河もアイセポス河も、また聖なるスカマンドロス河

とシモエイス河、——その河畔で多くの牛皮の盾、兜、

そして半神たる人間達が塵にまみれ伏したのだが——

これらすべての河口を同じ場所に輝けるアポロンはさし向けた。

九日の間防壁に向けて流れを注がせたのだった。またゼウスは雨を

絶え間なく降らせていた、いつそう早く防壁を崩して海中に漂わせようと。

また大地を揺るがす神ポセイドンは自ら、三叉の矛を両手で持つて

逸り立ち、材木と石の土台を波間に流すのだった、

それらはアカイア人が苦勞して築いたものだったが。

そして流れの強いヘレスポントスに沿って一面平らに均してしまった。

防壁を崩して、ふたたび広い浜辺を砂で被ったわけである。

そして以前に美しく水が流れていた

元の河筋に河の流れの向きを変えた。

ポセイドンとアポロンはそうするつもりだったわけである。

しかし今は戦いと雄叫びが燃え盛っていた、

堅固な防壁をめぐって。防壁の木組は音を立てていた、

射掛けられて。アルゴス人はゼウスの鞭で打ち据えられ、

うつろな船に押し込められて、身動きできずにいるのだった、敵を敗走せしめる強い男へクトルを恐れて。

へクトルは終始つむじ風にも似て戦っていた。

それはちょうど獵犬と狩人のただ中で

猪か獅子が、力任せにあちらにこちらにと立ち向かっていくよう。

狩人らは隊列を組み、

立ち向かう、そして立て続けに槍を投げつける、

しかし獣の雄々しい心は決して怯えない、

恐れな、そしてそれで身を滅ぼすことになるのだが

しきりに向きを換え、男たちの列につきかかる。

どちらに向かつていっても、男たちの列はそれに押されて引き下がる。

ちようにそのようにへクトルは軍勢の間を進み、味方を促していた、

濠を渡れと励ましていた。しかしそれでも脚速き

馬たちはその勇気をなくしていた。しきりにいなないていた、

濠の縁に立ちすくんで。濠が広く、すっかりおびえさせていた。

ひと跳びで渡るのも、歩いて渡るのも

容易なことではない。濠はどこも、その縁は両側とも

覆いかぶさるように切り立っていた。その上には鋭い

杭が打ち据えられていた。アカイアの子らがぎっしりと大きいのを

据えつけていたのだった、恐るべき敵を防ぐために。

そんなところに馬が見事な車輪の戦車を引いて入っていくのは

容易なことではないだろう。徒士の者らは渡れないものかと逸りたっていた。

ちようにその時ポリュダマスは豪胆なへクトルのそばに立って言った。

「ヘクトルよ、ならばにまたトロイア人の、そして援軍の指揮する方々よ。

無謀だ、脚速き馬を駆り立てて、濠を渡ろうというのは。

向こうに渡るのはひどく難しい。濠の際には鋭い

杭が立っているし、その向こうはアカイア人の防壁だ。

ここを馬に乗ってでは降りることも戦うことも到底できない。

場所が狭く、ひどい目に会うことになるだろうと思う。

もし天高きかずちを鳴り轟かすゼウスがトロイア人を助けてくれる、

確かなかならずアカイア人に悪意を抱いていて滅ぼしてくれるつもりならば

無論、このわたしも望むところだ、すぐにもアルゴス人が

名も知られることなく、ここアルゴスから離れたところで滅びることになるのは。

しかしもし相手が巻き返して、船陣から反撃し、

そしてわれわれが掘られた濠に落ち込むことになったら、

もはやそうなったら攻勢に転じたアカイア人に押し潰されて

一人の伝令すら町に戻っていくこともできなくなるだろうと思う。

さあ、みんな、これからこのわたしがいう通りに、しようではないか。

馬は従者たちに濠の脇に引き留めておかせよう。

われわれは徒歩になり、武器に身を固めて、

ヘクトルの後に全員一丸となって統こう、そうすればアカイア人は

持ち堪えられないだろう、確かにもし彼等に滅びの縄が結び付けられているならば」

このようにポリュダマスは言った。適切な提言でヘクトルの意になかった。

彼は直ちに戦車から武器を手にして地に跳び下りた。

他のトロイア人も戦車に乗ったままじっとしていたりはしなかった。

みな跳び下りた、神にも紛うヘクトルに見習って。

それから各自自分の従者に命じるのであった、

馬どもをきちんと濠の傍らに留めておくようにと。

一同分散して、隊列を組みなおし、

五つに編隊して、指揮者のあとに従っていった。

まずヘクトルと立派なポリュダマスに従った者たち。

その数はもつとも多く、もつとも意気盛んだった、

防壁を破り、うつろな船のそばで戦わんとして。

そして三人目の将として二人の後に従ったのはケブリオネス。戦車のそばには

ケブリオネスより劣る別の者をヘクトルは残した、

もう一つ別の部隊の指揮をしていたのはパリスとアルカトオスとアゲーノール。

第三の部隊の指揮はヘレノスと神にも似たデーイポボス、

二人はプリアモスの息子だ。三人目の将は英雄アシオス、

アシオスはヒュルタコスの子で、アリスベーのセレーイス河畔から

赤毛の大きな馬に運ばれてきたのだった。

第四の部隊の指揮はアンキーセースの優れた息子

アイネイアス。またその彼と共に、アンテーノールの二人の息子

アルケロコスとアカマース、二人は戦のことを万事よく心得ていた。

そしてその名も高い同盟軍を指揮したのがサルペードーン。

彼はグラウコスと軍神アレースのようなアステロパイオスを指揮者に加えた。

彼に次いで、他の者より文句なく優れていると見たからである、

彼は全軍の者より立ち勝っていたのである。

トロイア人は巧みに作られた牛皮の盾でお互いに身をかためると

ダナオス人を目掛け、必死になつて突き進んだ、そして思った、

ダナオス人は持ち堪えることなく、黒塗りの船の中で総崩れになるだろうと。

この時、他のトロイア人とその名も高い援軍は
誤ることなきポリュダマスの案に従ったのだが

ヒュルタコスの子、男らを総べるアシオスは好まなかった、
馬と手綱取る従者をこの場に残すことを。

そこで馬に乗って脚速き船に近付いていった。

愚か者よ、悪しき運命を免れ

馬と戦車を率いて意気高く、敵の船陣から

風そよぐイリオスに帰ることはできないことになった。

というのはその前にいとわしい運命が彼を被った、

デウカリオンの高貴な息子、イドメネウスの槍を用いて。

〔第十三歌三八九参照〕

彼は船陣の左手に突き進んだ。ちようどそこはアカイア人が

戦陣の平野から馬と戦車を駆って戻ってくる場所だった。

そこに馬と戦車を彼は進めた。そして見ると門は

扉と長い門で閉められていない。

男たちは開けたままにしていた、仲間の誰かが

戦から逃げてきたら、船陣の中に救い入りたいと思つて。

そこを真つ直目指して馬を駆っていた。部下たちも付いていった、

喊声をあげながら。もはやアカイア人は持ち堪えられまい、

黒塗りの船陣の間で総崩れになるだろうと思つたのである。

愚か者らよ、見ると、門のところには二人の勇士、

槍を振るうラピタイ人の勇猛な息子たちだ。

ひとりにはペイリトオスの子、力強きポリュポイテス。

もうひとりレオンテウス、ひとを滅ぼすアレースにも似た者。

この二人が高い門の入口の前に

立っていた。その様は山々に高々とそびえたつ樫の木が

大きな根を広く深くはりめぐらせて、

来る日も来る日も風と雨に立ち向かっているよう。

そのように二人は腕の力を頼んで

巨漢アシオスがやってくるのを待ちうけ、逃げようとしなかった。

トロイア人はしっかり造られた防壁をまつすぐ目がけ、乾かした牛皮の盾を

高く掲げ、大声を上げて、突き進んで来た、

隊長アシオス、それにイアメノスとオレステス、

そしてアシオスの子アダマスとトオンとオイノマオスを中心にして。

こちらの二人はしばらくは、脛当てよろしいアカイア人を

内にあつて、船陣を守れと励ましていたが、

しかしトロイア人が壁を目がけて突進してくるのに気がつくや、

そしてダナオス人が悲鳴を上げて敗走するや、

門のうちから躍り出て、前に出て戦い始めた。

それは山中で猪が

男らと犬どもの群れが押し寄せの待ち構えるよう。

斜かいに飛びかかりながら、まわりの木々をへし折り、

根もとからなぎ倒していく。そして誰かが槍を投げて命を奪うまでは

牙を鳴らしている

とでもいうように、二人の輝く青銅の鎧は胸元で音を立てていた、

真つ向から槍を受けて。確かに非常に力強く戦っていた、

一三〇

一三五

一四〇

一四五

一五〇

防壁の上の味方とおのれの力に頼んで。

味方の者らが大きな石をしつかり拵らえた櫓の上から

投げて、わが身と陣屋と脚速き船を

守ろうとしていた、それはちやうど雪が地上に舞い落ちるよう、

激しい風が黒雲を揺すって

多くのものを養う大地に絶え間なく降り注がせる雪のよう。

そのように兵士らの手から石が飛び交っていた、アカイア人から

そしてまた、トロイア人からも。双方で兜と臍のついた盾が

大きな石を投げつけられて乾いた音を立てていた。

するとその時呻めいた、そして自分の両腿を叩いた、

ヒュルタコスの子アシオスが。そして腹を立てて言うのだった。

「父なるゼウスよ、つまりまことにそれではあなたも嘘をつくのが

まったくもう好きな方だったのですね。わたしは思っていないかった、

アカイアの勇士がわれわれの力と無敵の腕前に耐えられるとは。

しかし彼等は胴もしなやかな雀蜂や密蜂が

険しい路のかたわらに巣を作り

うつろな巣を離れずに留まり

巣を狙う人間から子供を守るように、

彼等はたった二人なのに門から

引き下がろうとはしません、やるかやられるかするまでは」

このように言った。しかし言ってもゼウスの心を動かすことはできないでいた。

ヘクトルに手柄を立てさせるのがゼウスの考えだったので。

ほかの者たちは別の門のところで戦っていた。

その委細を神のように語るのはわたしには難しい。

到るところ石の防壁のまわりでは凄まじい火が燃え上がっていた。

アルゴス人は苦しみながらもやむなく

船を守っているのだった。ダナオス人に戦いの加勢をしていた

神々はみな心を痛めていた。

しかしラピタイ人は恐るべき戦いに立ち向かった。

そこでこの時、ペイリトオスの子、力強きポリュポイテスが

槍でダマソスを撃った、青銅の頬当てのついた兜を貫いて。

青銅の兜は遮れなかった。突き刺さり

青銅の穂先は骨を砕いた。脳髄は

兜の中で砕け散っていた。気負って向かって来たのを打ちふせたわけだ。

それからまたピュロンとオルメノスを討ちとった。

そしてアンティマコスの子ヒッポマコスをアレースの裔、

レオンテウスが槍で撃った、腰帯のところに当てて。

更に鞘から鋭い剣を抜き

群れを突き抜けて、まずアンティパテスに

迫り、打った。相手は仰向けになって地面に倒れた。

それからまた、メノンとイアメノスとオレステスを

次々と皆倒した、多くの者を養う大地に。

二人がこの者たちのきらめく武器をひき剥がしていると

一方ポリュダマスとヘクトルの後に従っていた若い兵士らが、

その数一番多く、もつとも立ち勝っており、逸り立ち、

防壁を破って、船に火をつけようとしていたが、

そういう彼等も濠の縁に立って思いあぐねていた。

というのは濠を渡ろうと逸っていた彼等に鳥が現れたからである。

空高く鷲が兵士らの左手に沿って

血の色をした巨大な蛇を爪に掴んでいた、

まだ生きてもがいていた。そしてなおも抵抗をやめていなかった。

というのはわが身を掴んでいる鷲の胸元、頸のあたりに、身を反らして

噛みついた。鷲は地面に蛇を振り落とした、

痛みに耐えかねて。軍勢の真ん中に投げ落としたのである。

鋭く鳴いて、風に吹かれて飛んでいった。

トロイア人は身震いした、真ん中に横たわり

うごめく蛇を見て。アイギス持つゼウスからの前兆である。

まさしくその時ポリュダマスは勇猛なヘクトルに近付いて言った。

「ヘクトルよ、そなたは、なぜかいつも集会でわたしが良い案を出しても

わたしを非難する。 まったくもってよろしくない、

兵卒の身で異議をさしはさむことは。評議の場でも

戦場でも、いつもそなたを立てるようにしなければならぬというわけだ。

しかし、今の場合もはつきり言おう、いちばん良いと思うことを。

向かっていくのは止めよう、船陣をめぐるダナオス人と戦おうというのは。

というのは今見た通りに事はなると思うから。濠を渡ろうと逸る

トロイア人にこの鳥が前兆として現れたのだ、それは確かだ。

鷲が空高くわが軍の左手をよぎっていった。

爪におおきな真つ赤な蛇を運んでいた。

生きていたやつだ。しかしじきにそれを離れた、自分の巢に戻らぬうちに。

運んでいって、自分の子らに与えられずに終わったのだ。

そのように、このわれわれも、たとえアカイア人の門と防壁を

強力な力で打ち砕き、アカイア人が退いても

船陣からもとの道を散を乱して引き返すことになろう。

実際トロイア人のうちの多くの者を置き去りにしていくことになろう。

そして船陣を守るアカイア人に槍で打ち倒されることであろう。

前兆のことを心得た予言者なら

はつきりそう解くだろう、また人も信じるだろう」

すると彼を上目遣いにらんで、輝く兜のヘクトルが言った。

「ポリュダマスよ、そなたの言っていることはわたしには気にいらぬ。

そなたはできるはずだ、もつとよい他の考えを言うことが。

もし本気でそんなことを言っているのなら、

それは間違いなく神々がそなたの心を狂わせてしまっているのだぞ。

雷を轟かすゼウスにそのはかりごとを忘れろとそなたは命じているのだから。

それは、御神自ら実行してくださいとわたしに約束してくれたものなのだ。

それなのにそなたときたら、長い翼の鳥のほうを信用せよという。

そんなものにはわたしはすこしも意に会さぬ、気にもしないぞ、

鳥が右手の曙の太陽の方に向かおうが

左手の、暗くなる西の方に向かおうが。

われわれとしては、大神ゼウスのはかりごとに従うことにしよう。

御神はすべての、死すべき者らと不死なる方々とを支配しておられるのだ。

ただ一つ、告げておられる最善のことは、祖国のために戦い続けること。

どうしてそなたは、打ち合い、戦うことを恐れているのか。

われわれ他の者が皆、アルゴス人の船の傍らで

やられても、そなたが死ぬ恐れはないはずだ、

だってそなたは敵にむかつて戦おうとしないのだから。

しかしもしそなたが戦いから身を引き、また他の者に

いろいろ言つて、戦いから退かせるなら

直ちにわたしの槍で打たれて命を失うであろう」

このように言つてヘクトルは先頭に立つた。そして他の者たちは従つた、

凄まじい喊声を上げて。すると、雷を築しむゼウスは

イーデーの山々から突風を吹きおろした。

それはまっすぐ船陣に向かつて砂埃を送りつけた。そしてアカイア人の

心をゼウスはひるませ、トロイア人とヘクトルに誉れを与えようした。

まさしくゼウスのこの兆しとおのれの腕に頼んで

彼等はアカイア人の大きな防壁を打ち壊そうとやりはじめた。

櫓の木組を引き抜き、胸壁を引き下ろそうとした。

突き出ている柱を引き抜こうとした、その柱はアカイア人が

櫓を支えるべく置いたものだったが。

これを引き抜こうとしていた、アカイア人の防壁を壊せると

思つて。しかしそれでもダナオス人は一步も退こうとせず、

牛皮の盾を柵のように巡らし

そこから防壁の下に迫る敵に飛び道具をいにかけていた。

両アイアスは先頭に立ち、防壁の上を

駆けめぐり、アカイア人を鼓舞していた。

或る者にはやさしく、またすっかり戦う気を亡くしている者を見れば

敵しく叱りつけていた。

「諸君、アルゴス人の中の、優れた者も、普通の者も、劣った者も聞け。みんなが戦いにおいて

同じ働きはできないが、今はみな働かなくてはならない。

このことはよく心得ているはずだ。誰一人として船に戻つてはならない、敵の叫ぶ声を聞いたからには。

前進し、互いに励まし合え。

稲妻を走らす、オリュンポスのゼウスも許してくれると思つて、戦いの流れを押し戻し、敵どもを町に追い返すことを」

このように二人は先に立つて叫びながら、アカイア人の戦いを煽っていた。

両軍は飛び道具を投げあつていた。それはちょうど知恵に富んだゼウスが雪を降らそう、人間どもにその雪の矢を放とうと思ひ立ち、

それで冬の日に雪が降りしきるよう。

風を静めて、絶え間なく雪をそそぎ、被い隠そうとするよう、高い山々の頂きと突き出た岩かどを、

れんげの原を、人々の耕す肥沃な畑を。

灰色の海の上、港と岬につもる雪は

波が打ち寄せ、押し退けるが、そのほかはすべて被いつつまれていく、ゼウスが激しく雪を降らせる時には。

ちようにそのように両軍から放たれたものは、一方はトロイア人に

一方はトロイア人からアカイア人へと双方に

しきりなく飛び交つていた。防壁ごえにいたるところ、喧騒が立ち上つていた。

その時、トロイア人と輝けるヘクトルが

二七〇

二七五

二八〇

二八五

二九〇

長い門のかかった防壁の門を打ち破ることは決してなかったであろう、

もしわが子サルペドンを知恵に富むゼウスが

アルゴス人に立ち向かわせなかつたならば。角のまがった牛に向かう獅子のように。

サルペドンはすぐさま盾を身の前にかまえた。その盾はまんなるく

青銅の、見事に打ち鍛えられたもの、すなわち鍛冶師が

打ち整え、内側は幾重にも牛皮を縫い付けたもの、

ぐるりと黄金の針金を用いて。

これを前にかざし、二本の槍を振り回しながら

進んで行った。その様は、山で育った獅子のよう、

長いこと肉にありつけず、猛げる気性からられて

家畜をものにしようと、頑丈な小屋にも入り込もうとする。

たとえその場に飼う男らが

犬と槍で家畜を守っているのを見ても、

やめない、小屋から逃げようとしぬい。

踊りかかって奪いとるか、あるいは自分の方が

先に、すばやい手から投げられた槍で打たれるか。

そのように神にも紛うサルペドンは激しい意気に燃えて

防壁に躍り上がり、胸壁を壊そうとした。

そしてすぐさまヒッポニコスの子グラウコスに向かって言った。

「グラウコスよ、何故われわれ二人はこの上もなく重んじられているのか。

上席に座って、肉も盃も他の者より多くあずかり、

リュキアでは、われわれを神のように皆が仰いでいるのか。

そして大きな領地をわれわれは持っているのか、クサントスの川辺に

果樹と小麦の実る立派な領地を。

されば今こそリュキア人の第一線にあつて

立ちほだかり、火と燃える戦いに臨まねばならない、

しつかり胸当てを付けたリュキア人のだれかれとなく、こう言ってくれるように。

「確かに並みの方ではない、リュキアを治めている

われらの王様は。肥えた羊も

極上のワインも召し上がっていても

そのお力も立派だ、リュキア人の先頭に立って戦っておられるのだから」

友よ、確かにもし二人がこの戦さから逃れおおせて

いつまでも老いず、死ぬこともなくいられる身で

あるというのならば、わたしも先頭に立って戦うことはしないだろうし

またそなたに、誉れをもたらす戦闘に立ち向かえということもないだろう。

しかし実際は、死神が数知れぬほど立ちほだかつている。

人間、これをさけて逃れることはできない。さあ、行こう、

われわれが相手に、それともわれわれに相手が誉れを差し出すことになるか」

このように言った。グラウコスは聞き捨てることも拒むこともしなかつた。

二人はリュキア人の大軍を率いてまっすぐ進んだ。

彼等を見て身震いした、ペテオースの子メネステウスは。

彼が守る防壁のところに彼等はやってきたのだつた、災いを運んで。

彼はアカイア人の隊列をずっと返り見た、

誰か味方から災いを防いでくれる大将の姿が見えないかと。

そして見た、二人のアイアスが、戦いにうむことなく立ちほだかつているのを。
それにテウクロスが陣屋から出てきたばかりで

三五

三〇

三五

三五

三五

近くにいる。だが叫んでも声を届かせることは全然できない。

それほどにも騒音は凄まじく、戦いの物音は天にまで達していた、
盾、馬毛の飾りの兜、それに門に

飛び道具が当って。門はすべて閉じられていた。相手は門に向かって
立ちほだかり、無理やり壊して押し入ろうとしていた。

すぐさまメネステウスはアイアスのもとに伝令トオーテースを遣わすのだった。

「神にも紛うトオーテースよ、走って行ってアイアスと呼んで来てくれ。

両方のアイアスだ。その方が一番よいだろう。

今にもここはまったくひどいことになろうとしているのだから。

リュキア人の大将らが、こちらに押し寄せて来たのだ。かれらはさつきから
前線にあつて力強く、猛烈な勢いでいる。

もしアイアスらの方でも戦いで大変だというのなら、

テラモンの子、強いアイアス一人でもよい、来てもらえ。

それに弓に巧みなテウクロスにもいっしょに来てもらえ」

このように言った。伝令は彼の言うのを聞いて服さぬ態度は取らなかった。

青銅の武具をまとったアルゴス人の防壁に沿って走っていった。

両アイアスのもとに行つて立ち、すぐに言うのだった。

「青銅の武具をまとったアルゴス人を率いるアイアスのご二人、

ゼウスに育まれたペテオースの愛する子メネステウスが頼んでおります、

こちらに来て下さるよう、しばらくでもよいので戦いに加わってほしいと。

お二人なら、それにこしたことはない、

いまにもここはまったくひどいことになろうとしているのですから。

リュキア人の大将らが、こちらに押し寄せて来たのです。かれらはさつきから

前線にあつて力強く、猛烈な勢いなのです。

もしこちらでも戦いが大変だというのなら、

テラモンの子アイアスお一人でも来ていただきたい、

それに弓に巧みなテウクロウスも来ていただきたい」

このように言った。テラモンの子、大アイアスは承知せずにはいなかった。

すぐにオイレウスの子、小アイアスに翼ある言葉をかけるのだった。

「アイアスよ、そなたと強いリュコメデスは、二人いっしょにここで

立つて、ダナオス人を励ましていてくれ、力強く戦い続けるように。

わたしはあちらに言つて、戦いに加わる。

しかしすぐにここに戻つて来る、先方を十分助けたら」

このように言つてテラモンの子アイアスは立ち去つた。

そして父親が同じの、兄弟テウクロウスも彼について言つた。

そしてかれらと一緒にテウクロウスの子パンデイオンが反つた弓を運んでいった。

防壁の内側をすすんで、勇敢なるメネステウスのいる櫓に

着いてみると、味方は押しまくられていた。

相手は胸壁に上ろうとしていた、暗い風にも似て、

力強く、リュキア人を率い、また命じていた。

両軍は真つ向からぶつかり戦つていた、そして雄叫びが上がつた。

テラモンの子が第一に倒した男は

サルペドンの僚友、大胆なエピクレウス。

とがった石を投げて倒した。それは防壁の内側、

胸壁わきに積んであつた一番上の大きい石。それを簡単に

両手で持てる男は、血気盛りとはいへ、

三六〇

三六五

三七〇

三七五

三八〇

いま時の人間にはないだろう。アイアスは高く持ち上げて投げた。

四つのとさかの兜を砕いた。頭の骨をのこらず

打ち砕いた。相手は軽業師のように

高い城壁から落ちた。命が骨を離れた。

テウクロスは、ヒッポクロスの子、力強いグラウコスが

高い城壁を目掛けて突き進んでくるのを矢で射た、

片腕があらわになったところを見て、そのところを。そして戦意を削いだ。

グラウコスは防壁から後ろにひそかに飛び降りた。アカイア人の誰かが

自分が射られたのを見て、言いはやし自慢しないように。

サルペドンは落胆した、グラウコスが立ち去っていくのに

すぐさま気付いて。しかし戦意を失わず、

テストールの子アルクマオンを槍で突いて

刺した。穂先を引き抜いた。相手は槍に引かれてうつ伏せに

倒れた。青銅の飾りのついた武器がカタカタと音を立てた。

サルペドンは逞しい両手で胸壁を掴んで

引いた。胸壁はそっくり落ちて、防壁の

上が丸だしとなり大勢のものが通れるようになった。

そのサルペドンにアイアスとテウクロスが同時に襲いかかり、テウクロスは

身を被う盾の、相手の胸のあたり、見事な吊り帯のところを射た。

しかぜウスは、わが子から死の定めを

防いでやった、船尾のところを打ち取られることのないようにと。

一方アイアスは盾を槍で突いた、飛びかかって。しかし穂先は

通らなかった、勢い込んだ相手の出足は止めたが。

サルペドンは胸壁からすこし後退りした。しかしすっかり退却することはしなかった、手柄を立てたいとの意気に燃えていたから、神にも紛うリュキア人の間を回って命じた。

「リュキア人よ、どうして激しく戦うことをしないのか。いくら力があるといっても、わたし一人で壁を壊して

船陣への道を切り開くことは難しい。

さあ、いっしょにかかって行け、人手が多いほうが事はうまくいくぞ」

このように言った。一同は王の叱責を恐れ、

指揮を取る王を囲んで一層激しく突き進んだ。

もう一方のアルゴス人は、防壁の内側

戦列を固めていた。両軍にとっておおごとになっていた。

というのは力あるリュキア人もダナオス人の防壁を破って

船陣への路を開くことはできないでいたし、

ダナオスの兵も、リュキア人を防壁から

押し戻すことができないでいた、先に押し寄せてきたので。

それはちょうど二人の男が境界石をめぐる、もめているよう、

手にはかりざおを持ち、公有地で。

そしてその二人が、わずかな土地を公平に仕切ろうとしているよう、

まさしくそのように胸壁が両軍を分け隔てていた。両軍は壁こしに

お互いに胸元を守っている牛皮の盾を裂きあっていた、

丸い盾やら軽い小盾やらを。

多くの者が非情の槍で膚を刺し貫かれていた、

戦っているうちに後ろ向きになり背中がむき出しになって、

また盾をもろに突かれた者も多い。

至るところ、防壁と胸壁はトロイア人とアカイア人

双方の血に染まっていた。

しかしこうなってもトロイア人はアカイア人を敗走させることはできないでいた。

手間賃稼ぎの女が用心深く秤を

重りと羊毛が両方等しくなるように持ち上げている、

それは子供たちのためにわずかな賃金を手に入れるためだが、

ちようどそのように両軍の戦い、戦闘は互角に張りあっていたが

ついにゼウスは勝利の榮譽をプリアモスの子ヘクトルに

与えた。彼は先頭に立ってアカイア人の防壁に飛び込んだ。

トロイア人に呼びかけて鋭く叫んだ。

「進め、馬を馴らすトロイア人よ、アルゴス人の壁を打ちやぶれ。

船に火をつけ焼き尽くせ」

このように言つて激を飛ばした。トロイア人は皆これを耳にしなが

ら一団となつて防壁に突進した。そして

壁の張りだしを登り始めた、鋭い槍を手にして。

一方ヘクトルは石を抱えて運んで行った。その石はといえ

ば壁の入口の前にあつたもの。下はがっちりして上の方は

とがっていた。これは飛び抜けて力のある男が二人がかりでも

容易には地面から車の上に持ち上げることできないだろう、

今時の人間には。これをヘクトルは一人で易々と振り回していた。

狡猾なクロノスの息子ゼウスが軽くしてやったのである。

羊飼が牡羊から刈り取った毛を片手に持ち、

易々と運んで行く、その重みが少しも苦にならない

とでもいうようにヘクトルは石を持ち上げ、真つ直門扉に向かって運んで行った。その扉が守っていた門はといえば実にしっかりとした造りで

高く二重になっていた。内側には二本の門が

互い違いになっていて、一つの錠前でとめてあった。

ヘクトルはすぐ近くに行つて立つた。そして力をこめて扉の真ん中に投げつけた、両足を踏ん張つて、そして石の勢いが弱くならないように。

上下の枢(とぼそ)を壊した。石は内側に落ちた、

その重みで。左右に門は大きく音を立てた。門は

持ちこたえられなかった。扉板はばらばらに割れた、

石の勢いのために。続いて輝けるヘクトルは躍り込んだ、

その顔付きはさつと近寄る闇夜のように。身にまとう青銅の武具は

おそろしげに輝いていた。両手に二本の

槍を掴んでいた。誰も彼に立ち向かい止めることはできなかったろう、

神々を除いては。門内に突入したのである。眼は火と燃えていた。

そして振り返りトロイア人の一同に向かって命じた、

防壁をどんどん越えていけと。一同は激を飛ばす彼に従つた。

ただちに防壁を乗り越えるもの。あるいは堅固な門から

なだれ込むもの。ダナオス人は逃げた、

うつろな船の間に。そしていつ果てるとも無い喧騒が湧き起こつた。

四五五

四六〇

四六五

四七〇

第十二歌了

ホメロス『イリアス』第十二歌